

日中韓建築文化遺産保存 国際学術会議

はじめに 日本の古代、中世建築を研究する上でアジア諸国、とりわけ東アジア各国の遺構研究の重要性は論を待たない。近年中国、韓国でこの分野の研究が大きく進んでいることから、奈良文化財研究所では、中国文化遺産研究院、韓国国立文化財研究所とともに、東アジアの建築文化遺産とその保存に関する共同研究をおこない、2009年度からは、建築文化遺産保存国際学術会議を毎年持ち回りでおこなっている。

2011年度は第3回目にあたり、中国北京の文化遺産研究院で10月12～14日にわたり、「仏塔建築保存」のテーマで会議をおこない、延べ約200人の参加があった。会議は3つのセッションに分かれ、1日目午前は「仏塔研究」、午後に「仏塔保存研究」、2日目は「仏塔保存実践」のサブテーマで3国から11名の発表があった。3日目は北京近郊の銀山塔林へのエクスクーションで、実際に修復された石造塔を前に意見交換をおこなった。以下各国の発表内容を簡単に報告する。

仏塔研究 中国文化遺産研究院、温玉清による「中国の華北と遼西地域における遼代仏塔の分布、様式と源流」では、中国古代建築の中で大きな位置を占める遼代の仏塔建築が密教の影響で八角平面を採るようになったことを論じた。

奈良文化財研究所、箱崎和久による「古代東アジアの八角木塔とその構造推定」では現存の八角平面仏塔と遺跡から、八角木塔の構法として大規模で入側柱を持ち、隅斗栱の平側手先が壁付きの延長に出る山西省応県木塔形と、比較的小規模で入側を持たず、隅斗栱の平側手先

が壁付きに直角に出る長野県安楽寺八角三重塔形の2つのモデルが存在する可能性をあきらかにした。

韓国国立文化財研究所、趙恩慶による「韓国における仏塔の類型と原始的な石塔」では韓国の塔建築の類型と木造から石造や煉瓦造に変化する様を論じた。柱楣式の構造を持つ益州弥勒寺跡石塔の解体調査からあきらかになった心柱の存在によって同塔の「木塔の翻案」という従来の位置づけがより強固になったことを紹介した。

仏塔保存研究 中国文化遺産研究院、候衛東による「多層木塔の屋根構造と全体の安全性」では中国多層木造建築物の構造原理と弱点について論じた。中世以前の積上式と明清代に造られた日本の長柱式に相当すると思われる天柱式の内容を紹介した。

奈良文化財研究所、鈴木智大による「日本の木造塔の構造とその変遷」では古代から近世への積上式から長柱式、櫓式への構造の変化や、塔の内部空間が仏堂化するにしたがって初重内部の四天柱、心柱が省略されることについて紹介した。

韓国国立文化財研究所、裴秉宣による「韓国における塔の修理－その現状と課題」では植民地時代から現在に至る、現存唯一の木塔である法住寺八相殿（1624年建築）を含む仏塔修理のレビューと、現在の修理に関する考え方を述べた。美術史や考古学との連携、工事各工程記録の保存、現場の一般への公開などの方針が示された。

中国文化遺産研究院、瀋陽による「泉州開元寺双塔の保護に関する前期研究」では福建省泉州に残る宋代の石造五重塔の構造、材料の劣化についての調査と対策について述べた。開元寺仁寿塔、鎮国塔はともに13世紀前半の建築で、俊乗坊重源が12世紀後半に中国から持たせたとした様式である日本の大仏様建築に酷似した細部を持つ注目すべき遺構である。

同、王安林、候衛東による「応県木塔の構造の現状と安全のためのモニタリング」では山西省応県にある1056年建築の世界最大の木造五重塔、仏宮寺釈迦塔の構造モニタリングの成果を発表した。過去の地震や内戦による砲撃の影響で塔が傾いていることが知られ、1975年から構造全体に関する測量をおこなっていたが、現在も傾きが増大し、予断を許さない状況であることをあきらかにし、中国の文化財建造物に携わる人々にとって目下の大きな関心事であることをうかがわせた。



図28 文化遺産研究院での会議の様子

仏塔保存実践 中国文化遺産研究院、永昕群による「四川省徳陽龍護舍利宝塔の震災後のレスキューと修理・保護」では、2009年に起こった四川大地震で被災した元代の十三重磚塔の罹災当初の応急措置とその後の本格的な修理の状況を紹介した。日本においても東日本大震災に被災した文化財建造物の復旧は急務であり、同様の努力をおこなっている中国の関係者と思いを共有した。

奈良文化財研究所、林良彦による「本門寺五重塔の解体修理に伴う構造上の問題」では1997年から2002年にかけておこなわれた東京都大田区所在の本門寺五重塔（1607年建築）の解体修理に際して調査によってあきらかになった、積み上げ式から長柱式に移行する過渡期にある五重塔の塔身の中央よりも側廻りが大きく沈下するという構造上の問題と、これに対し修理に際し施した丸桁桔の挿入や折損した通肘木の炭素繊維積層板による補強について紹介した。

韓国国立文化財研究所、金賢龍による「弥勒寺跡石塔の現状と修理・保護の方案」では現在修理中の639年に建てられた韓国最大の石塔、旧百済の益州にある弥勒寺跡石塔の現状について報告があった。弥勒寺跡石塔は当初九重塔であったと考えられ、この塔と伽藍中心軸に対称の位置にかつてあったことがわかる東塔が新たに復元されているが、この塔自身は長い年月の間に部分的に崩壊し修理前は部分的に六重までが植民地時代に作られたコンクリートの構造体に支えられて建っていた。崩壊した石材を調査し、これを現状の形で残すのか、六重まで完形に復原するのかどうか、現在検討していることを紹介した。

おわりに 日中韓3国はともに木造を主体とする建築文化を持つが、こと仏塔については大きく状況が異なる。木造塔の豊富に残る日本に対し中国、韓国では石造、磚造が多く、仏塔に関する共通イメージがそもそも異なることが浮き彫りになった。木造建築遺構は、構成する材料から得られる情報が圧倒的に濃いこともあって、我が国では修理技術者が建築そのものの保存修理に終始してきた嫌いがあるが、石造や磚造の遺構の占めるウエートの重い中韓両国では保存修理に際し遺跡整備的なセンスが必要であることがよくわかった。同じ事象であっても、問題意識の微妙に異なる3国が一堂に会し、意見を述べ合うことによって新たな視点に気づかされることも

多い。応県木塔の調査や弥勒寺跡石塔の修理など、東アジアで現在進行中の話題を共有できたことも大きかったが、このことを仏塔というテーマを通じて再確認できたことが一番の成果であった。今後もさまざまなテーマで交流を深めたい。

（林 良彦）



図29 山西省応県木塔



図30 銀山塔林でのディスカッション